

# NEWSLETTER

No.2  
Vol. 43  
2017.3

What's  
New

〔鼎談〕 大学や企業を取り巻く課題とその取組

浜松ホトニクス  
株式会社  
代表取締役社長

晝馬 明

静岡大学長

伊東 幸宏

浜松医科大学長

今野 弘之





# 【鼎談】 大学や企業を取り巻く課題とその取組

浜松ホトニクス株式会社代表取締役社長 晝馬明氏、  
 国立大学法人静岡大学学長 伊東幸宏氏に、  
 大学や企業を取り巻く主要な課題を中心にお話を伺いました。



**今野 弘之**

浜松医科大学長

**晝馬 明**

浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長

**伊東 幸宏**

静岡大学長

**今野** まず初めに、大学運営について、本学が目指す大学について、簡単にご説明させていただきます。

グローバルであることが前提となっている今日、時代の変化をいち早く捉えて、柔軟かつ確に対応する必要があり、私自身は、「常に変化する」という認識が重要であると考えております。本学は、開学42年目を迎え、これまで教育、研究、診療に

加えて、産学連携、地域貢献とさまざまな実績を上げてまいりました。今後さらに独自の持続的な成長を遂げていくためには、明確なビジョンのもとに方向性を職員が共有し、特色ある強みをつくり上げていく必要があると考えております。また、海外からの留学生、研究者を積極的に増やし、国際性がある多様な人材の活用を目指すとともに、女性が活躍できる場をつくって

く必要性を感じております。さらに、光医学研究を中心とする本学の中核的事業の発展と新規研究の開拓、最新の医療機器の整備等のために財政的裏づけが必要であると考えて、本年度から浜松医科大学基金を設立したところです。為すべきことが多々ありますが、中期目標である持続的な競争力を持つ付加価値の高い医科大学を創り上げていきたいと思っています。

## 【これからの取組みについて】

**今野** これまで、企業及び大学のトップとして多くの実績を残されているお二人に、これまでの取組み、そしてまた、今後の取組みについてご教示いただければと思います。

**晝馬** 浜松ホトニクスでは、中央研究所で「ライフホトニクス」というテーマで研究を行っております。また、製品の売上は連結で約1000億円に届いておりますが、そのうちの約4割が医療関連に用いられている光センサなどの売上です。そのため、我々にとって「医療」は非常に大きく、かつ大切な分野でございます。ですから、浜松医科大学が設立された時から我々も大きく関わらせていただいております。

医療機器の将来について申しますと、今までは大きな装置のところに患者さんがいらしていたのが、今後は患者さんのところに小型化した装置が行く、ということになって考えています。すなわち病気という段階だけではなく未だ病気ではない段階まで、装置が高度化しつつも小型化していくことでカバーできる領域、すなわち医療と健康をマッチングさせる領域が広がっていきます。そういうところが、我々が、今までもそしてこれからも力を入れていきたい研究分野です。

**今野** 医療機器のところに患者さんが行くのではなく、診断や治療のための機器が向上し、小型化することで、機器が患者さんのところに行くという発想は、とても魅力的なお話です。具体的な医療機器の開発についてご教示ください。

**晝馬** 我々の光センサを採用いただいで

いる医療機器の中でも大きな比重を占めるのが「X線CT」と「PET」という画像診断装置です。X線CTはエックス線を使い、PETはガンマ線を使う装置で、これら無しには今や先端医療は成り立たないとは思いますが、我々は光の会社ですから、究極的にはこういったものを「放射線」ではなく「光」でやりたい、光のCTを作りたいと思っています。脳の中を光、すなわち近赤外光という領域の光で診るのは非常に難しいのですが、それでもやってみたくと思っています。その一歩として、浜松医科大学のご協力でも光マンモグラフィに取り組みしています。光で乳がんを見つけるという装置です。

実は近赤外光を使って脳の血流をモニターする「NIRO(ニロ)」という装置はすでに製品化しております。これも小さい装置なんですけど、先ほど申しました患者さんのところに行く装置として、さらにポータブルにした「Pocket NIRS(ポケットニルス)」という装置もあります。

日常生活の中で健康のパロメーターとなるものを測る装置にも我々の光センサを使っていたらと思っています。

**今野** 伊東学長、これまでの取組み、今後の方向性等について、お話をいただけますか。

**伊東** 就任したときに4つのことを申し上げました。1つが、人を大切にする大学にしたい。特に学生を大事にしたい、勉強をするのだったら静岡大学でと言われるような大学にしていきたい。それから、2番目には、やはり地域にある国立



大学としての存在感をつくり上げたい。地域の知の拠点、文化の拠点、人材育成の拠点、産業創出の拠点、未来創生の拠点にしていきたい。3つ目が、幾つかの研究分野で世界のトップレベルの研究力を養う。4つ目が、グローバル化とかダイバーシティへの対応。

**今野** 方向性はもう確定していたわけですね。

**伊東** それで、学生が勉強するならというので、特に学士課程に関して、教育のプログラムの改革をいろいろこの7年間やっていますね。ほぼ全部の学部が何らかの形で改編しています。特に今年から始めた地域創造学環という全学共通教育プログラムとして立てているのは、少し特徴的で、要するに学部の組織ではなく教育プログラムという形にしました。それは学部という、どうしても学問領域で切り取って積み上げ型の学習をしていくという形になって、それにふさわしい学問領域もあるけれども、そうじゃなくて、今は課題解決型の学習というのができるので、そういうことができる環境として学環というのをつくってきたんですね。今年1年生が入ってきたところですから、

## 目次

### トピックス 1-6

- 鼎談 晝馬 明 浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長
- 伊東 幸宏 静岡大学長
- 今野 弘之 浜松医科大学長

### 研究最前線 7-8

- 急性期脳梗塞に対するレーザー血栓溶解治療システムを開発 7
- 離乳期早期の鶏卵摂取は鶏卵アレルギー発症を予防する 8

### 退職によせて 9-10

### 海の向こうで 11-12

- 日独勤労青年交流事業に参加して 11
- フィンランドへの研究留学 12

### 大学ニュース 13-17

- 各種行事 13-14
- 留学生の紹介 15
- サークル紹介 16
- 学会賞等受賞 17

### 公開講座ズームイン 18

- 「歯なしにならない話」～年齢とともに変わる口腔ケアの重要性～

### 主催学会・シンポジウム 19-20

- 第12回日本股関節鏡研究会
- 第4回日本シミュレーション医療教育学会学術大会
- the 1st joint meeting of ISFP and PA workshop (第1回合同国際会議;第23回国際線路学会/第16回プラスミノゲン活性化ワークショップ)
- 日本産業看護学会第5回学術集会
- 第39回日本小児遺伝学会学術集会
- 第16回慶北-浜松合同医学シンポジウム浜松会議

### 卒業生は今 21-22

- 小児がんに対するより良い医療を目指して 21
- 保健師としての新たな挑戦 22

#### 表紙の写真

鼎談：外部からの視点を交え、特に学長自ら強いメッセージを発信し、社会にアピールしていく国立大学協会の広報戦略及び本学広報活動の一環として行われました。

平成28年10月25日撮影





浜松エリアに新しい企業群が  
どんどん出てくることが  
私にとっては実現可能な夢です。



## Profile

晝馬 明

静岡県浜松市出身  
米国ニュージャージー州立ラトガース大卒  
1984年 浜松ホトニクス入社  
ハママツ・コーポレーション(米国)  
社長を経て2009年12月から  
浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長

これがこの後どうなるか、すごく楽しみにしているところですね。

研究の成果として今一番期待しているのが、8Kテレビですね。2020年の東京オリンピックで、8Kで放送を世界に発信したいということをNHKもおっしゃって、その8Kテレビの撮像機器に本学研究所の川人教授が研究している方式が採用されつつあるということ、そこはとても期待しているところです。

**晝馬** 「浜松光宣言2013」の成果のひとつとして、浜松医科大学と静岡大学、光産業創成大学院大学の協働で「光創起イノベーション研究拠点」が静岡大学の浜松キャンパスの中にできました。この拠点の中で、専用の眼鏡をかけず自然な

## 医療情報の活用について

**今野** 浜松はものづくり産業が大変盛んなところであり、全国一ではないかと私は思っているわけであり。一方で、情報に関する産業はあまり多くはない、もちろん、この問題は浜松に限らず、いろいろな都市でも同じような状況であるとは思っています。特に、日本の情報学はアプリケーションの分野で、アメリカや中国からも大分遅れているのではないかとこの指摘もあります。

医療における情報は、今後、大きなテーマになってくると思いますが、そのあたりのお考え、将来の方向性について、伊東学長からお考えをお聞かせいただければと思います。

**伊東** 浜松はものづくりというので、やはりハードが中心ですね。なかなか今後、ソフトのほうに力が集約できないというので、これも昔からそうでしたし、どちらかという、日本全体がわりとそういう社会でしたよね。

でも、ソフトウェアの重要性というのはこれからますます大きくなっていくだろうし、結局、今後何をやるにも情報というのが、要するにIT技術、ICT技術を抜きにして、何かをやるということはどうもできない世の中になっていくということも前提として考えなくてはいけないと思っております。

3Dの画像を出そうと今、若手が中心となって研究を続けています。

ただ、これって凄く高い目標なんです。実際にそこまで行けるかどうかすらわからない。だけど、そういった高い目標を目指すことが重要で、その途中で出てきた成果もほかのいろいろな分野に応用されていく……。私がいつも言う「セレンディピティー」です。

高い目標を持つ、そこに行かないけれどその途中に新しい応用を発見できる、そういった若い人たちがどんどん生まれてきたら、と思っています。

**今野** セレンディピティーは研究の進歩に不可欠で、医学・医療研究においても研ぎ澄ませておくべき感性だと思っています。

静岡大学では、国立大学の中でいち早く情報学部というのをつくって、きっちりとした情報教育というのをやりたいとやってきたのですが、まだまだ力には及ばないところがありますが、得意分野というのを浜松でつくっていかなくちゃいけないと思っております。

**今野** 私どもは単科の医科大学です。情報に関係する学部等は全くありません。医療情報学がとても重要であることは認識していますが、まだまだ残念ながら、医学教育としても、不十分な状態です。

一方で、伊東学長のおっしゃるように、医療におけるICTは必須ですし、お話を伺うと益々その意を強くします。

**晝馬** 我々も新しい医療機器を開発したり、浜北区には「浜松PET診断センター」を持っておりますので、総合的な検診のデータや、ウェアラブル装置での日々の健康状態のモニタといったデータの融合についてはなんとなく実感があります。

先生方の判断のために、いい材料といますか、いろんな適切なデータを出せるようなハードウェアやソフトウェアの技術が進展して、先生方がますますよい診断ができるような、そういった時代が来るのではないかなと思っております。

**今野** とても興味深いお話で、まさに私が考えている方向性と一致していて、とても心強く思いました。今お話で取り上げた予防、それから健康管理、疾患予測など、医療・健康管理の分野で、ICTが全面的に活用される時代が間違いなく来ると思います。

いろいろな医療機器による診断の結果とリキッドバイオプシーをはじめとする血液的なデータ、独自の健康パラメータをデータとして有効活用することで、個人個人の疾患予測が可能となる。もちろん予防に繋がるし、ひいては個人にとっても利益があると同時に医療費の削減にも繋がるということだと思います。

## グローバル人材の育成について

**今野** これからの医療人、医学研究者はグローバルな活動が前提になります。コミュニケーションツールとしての英語力は必須で、それに加え、国際感覚を身につけることが大変重要だと考えており、浜松医科大学では国際交流協定校における臨床実習を推進しております。また、今年から新たに留学生を対象とした奨学金制度を設け、海外からの留学生の大学院への入学を積極的に受け入れており、最初の奨学金授与者が、10月に入学しました。海外からの大学院生や研究者との交流を日常化することで、学生や若手の国際感覚の涵養、特に、価値観と文化の多様性を肌で感じて、柔軟で抱擁力のある医療人、研究者を育成したいと考えております。できれば、アジアも大切ですが、欧州、米国、アフリカなど世界各地から浜松医科大学に来ていただき、本学の大学院生、若手医師・医学研究者に多極的な視点を身につけてほしいと思っています。

静岡大学ではABP、アジアブリッジプログラムというグローバル人材育成のプログラムをつくられていて、理工系の専門性に経営的思考、文系の専門性に対する理工学的思考を合わせ持ち、広い視野のもとで、アジアを中心とする海外で活躍する人材の育成ということを目的と

**伊東** 静岡大学には医学部がございませんので、やはり浜松で、例えば光創起イノベーション研究拠点の中でも健康というのは1つのテーマになっていますから、そういうところで浜松医科大学のご指導をいただきながら、やはり1つの得意分野として、健康・医療系のICT活用というのが重要なことだと思います。

**今野** 浜松医科大学としても興味深いお話です。医療分野における情報学の充実と医療情報関連事業の展開も含め、健康寿命ナンバーワンという地域特性もありますので、浜松のテーマとして推進することが大切だと思います。

してうたわれています。グローバル人材の育成に対するお考えをお聞かせください。  
**伊東** アジアブリッジプログラムは、学士課程全学で毎年40名入学させたいと。それから、修士課程も40名、学士課程4学年、修士課程2学年の6学年で40人、ですから、240人を新たに増やしたいという目標を立てています。

学士課程の場合には、日本語できちんと学習させて、日本語で技術が語れるアジア人を育てたいというのが1つの考え方です。

それと、もう一つは、静岡大学にあれば、そこで勉強するだけでも国際的な感覚というのは養っていけるんだということを実現させたい。さらに海外へのインターンシップですとかそういうのを進めながら、日本人をグローバルに育てるためにも、やっぱり10%ぐらいの外国人というのは常にキャンパスにいるというような環境をつくっていききたいなと思っています。

**今野** 全く賛成ですね。海外の留学生、特に大学院生の10%、20%は海外から来ていただいて、常に英語が飛び交っていて、いろいろな国の方がいろいろな文化を持ち、討論するというのがもう当たり前のような光景になっていると。そういうところで私どもの医学生、看護学生と一緒に勉強させていただく、これが一番

一緒に新しいイノベーションを  
創出していけるような土台を  
築き上げていきたいですね。



## Profile

伊東 幸宏

東京都出身  
早稲田大学理工学部卒  
工学博士  
1990年 静岡大学工学部着任  
2007年 情報学部長  
2010年4月から第14代静岡大学長



創り上げていきたい。  
付加価値の高い医科大学を  
持続的な競争力を持つ



国際感覚を養うにはいいのではないかと考えております。

**晝馬** 我々も毎年100人程度の新人を採用しています。先ほど売上の約40%が「医療」分野と言いましたけれども、地域的には売上の約70%が海外で、非常に多くの営業マンあるいは技術者が海外出張にでます。そのときに、やはり国際的な視野で物事が語れるかどうかというのが非常に重要になってきております。

日本人的な考えというのももちろんいいのですけれども、日本人的な感覚を保ちながら国際的視野を持つことが重要です。大学でそういった国際的視野を持っている人材をどんどん育てていただけると、我々としても非常に助かります。

**今野** グローバル人材は、日本人としての価値観や文化的見識を持った上で国際的視野を持つべきだ、とのご指摘は正鵠を射ていると思います。

## 産学連携について

**今野** 浜松医科大学は、平成28年1月より発足いたしました光先端医学教育研究センターが中心となって、光医学の研究と基礎的成果を応用した産学官連携を進展させ、一方で、新たな研究シーズ探索を目的として、独創的、先進的、国際的研究を行っていききたいと考えています。

私どもの強みの1つが産学連携ということでございまして、地域特性であるものづくりと、まさに「やまいか」に代表されるチャレンジングスピリットは、産学連携の促進に有形無形の貢献していると思っております。

地元の企業や地域のアカデミアとこれまで産学連携を推進して、おかげさまで多く

**晝馬** 「浜松光宣言2013」で提起したもののひとつですが、浜松を世界の「光の先端都市」にしたい。それとともに、世界各国の研究者とのインタラクションが非常に大切だと思います。ですから、若い世代に私が言っているのは、日本の中で研究するだけではなく、若いうちにとにかく海外に出ると。見識を広げよ、ということです。海外の研究者というのは非常にビジネスオリエンテッドのアプリケーションをいろいろ考えてやっている方が多いので、彼らと一緒に研究して、それから何かを得てきて、新しい事業を始めるような人材に育てていきたいと思っています。

**今野** 今の浜松医科大学も、欧米の大学と日本の大学は研究面で何が違うのかということをよく検証して、何が企業にとって魅力的な研究なのかということも、もう一度よく考えなければと思っているところです。ありがとうございます。

の成果を上げてまいりました。特に静岡大学、それから浜松ホトニクスとの連携は、その中核をなしていることは論を俟ちません。**晝馬** 普通にあるものをつくるのでは競争に勝てませんから、ある特別な知識、尖った知識を持っている人がベンチャーをやれば成功する確率も高くなります。健康産業というのは数多くある産業の中で成長する領域だと思います。

浜松医科大学発の「先取りニーズ」についての知識を持って、例えば静岡大学がそういった装置をつくる、装置は浜松ホトニクスが開発してきたセンサで優位を保つ、光産業創成大学院大学や金融機関がベンチャー運営を支援するという

ように、浜松エリアに新しい企業群がどんどん出てくるようなことが私にとっては実現したいし、実現可能な夢です。

**今野** 大学発のベンチャーも注目されて、まさに浜松医科大学も着手しているところですが、既にベンチャーをつくられている大学は、少なからずあるのですが、うまくいっていないケースが多いように思います。

**伊東** 産学連携ということだと、静岡大学も地元との産学連携が多いのが1つの強みです。この地域でいうと、先般、イノベーション・エコシステムが文部科学省の事業で採択になりましたね。ああいう形で静岡大学も浜松医科大学の先生方も一緒になって新しいイノベーションを創出していけるような土台というのが、あの事業、今後5年間でそれは築き上げたいですね。

それから、光拠点棟ができて、研究拠点はでき上がりつつあります。今度、このイノベーション・エコシステムを活用して、やはり産業育成というところをもう一つの柱として進めていきたいというところですね。

**晝馬** 政府はもっと大学にお金をばーんと出して、その大学の先生たちは地方の中小企業に新しい道筋を助言できるような、あるいはプロトタイプまで一緒に手を携えてやっていけるような新しい仕組みを、地方でもっとどんどんやっていくべきです。

「光」あるいは「Photonics」というものが世界的に非常に注目されています。ヨーロッパはその先駆的な地域です。そんなヨーロッパが何をしているかという、さまざまな分野の大学の先生のネットワーク、専門家のネットワークをつくり、Photonicsをベースにした新しいビジネス

を創るためにEUが資金を投入します。中小企業にお金を渡すのではなくて大学にお金を渡し、大学の先生たちは中小企業が光を使ってどういった新しい製品をつくらせていくべきかを指導し支援しますが、それをどうやって実践していくかというのを、1人の先生じゃなく専門家達のネットワークが担うのです。私は、これは非常に使える仕組みではないか、この浜松でそういったネットワークをつくらせていくべきではないか、と思っています。初めは小規模かもしれませんが、新しいシステム

## 将来への希望

**今野** 最後に、本学に対します期待といますか、将来の希望などお話をいただければと思います。

**晝馬** 浜松ホトニクスは、売上の約40%が医療関係であるということで、最先端の医療分野で何が必要になるのかということ、浜松医科大学といろんな共同研究をやらせていただくことで得たいと思っています。たとえば、最近でいえば、頭部用の次世代PETがどういった分野でどのように使われるのか、などです。

もうひとつ例を挙げれば「レーザによる血栓溶解システム」ですね。浜松医科大学から多大な協力をいただいています。最先端の医療技術というのは一体何なんだというものを教えていただく、それを我々と一緒にやっていただけたらというところに、我々は非常に大きな期待をしているところです。

**伊東** 静岡大学としても、光宣言の中で浜松医科大学との共同の研究というのを非常に期待しているところですし、それ

を浜松で興すのです。

**今野** 情報の量、質ともに拡大するわけですね。個々の研究者が世界に繋がっていますから、それがさらに繋がればということだと思います。

**伊東** あとは、官と金がどういう働きをするか。

**今野** どのように絡んでくるかということですね。産学官金といえますね。また産学学官ともいいますので、どんどんネットワークを広げていくという考え方は非常に大事だと思います。

から、今日お話のあった情報系の話、光以外にもいろんな面でこれからご協力いただきたい分野はたくさんありますので。

**今野** 浜松に静岡大学をはじめとするアカデミア、そして、浜松ホトニクスをはじめとする世界有数のものづくり企業があるということ、国際的に活動されているということは、本学にとっても大変有難いこととございます。

産学連携など本学の強みや特色を伸ばすことにより、教育研究の拠点として、また、先進医療、地域医療、社会貢献の拠点として持続的な成長ができるように機能強化を図っていききたいと思っています。

特に、独自の研究成果を世界に発信し、産学連携を進めるため、融和と協調をベースとした透明性のある大学運営を行っていききたいと思っております。これからもご協力とご支援を心からお願い申し上げます。



## Profile

今野 弘之

岩手県大船渡市出身  
慶應義塾大学医学部卒  
医学博士  
1987年 浜松医科大学着任  
2004年 教授  
2014年 副学長兼附属病院長  
2016年4月から第7代浜松医科大学長

専門は消化器外科



# 急性期脳梗塞に対するレーザー血栓溶解治療システムを開発



薬理学講座 教授  
梅村 和夫

浜松医科大学、浜松医療センター、および浜松ホトニクスの研究開発チームは、急性期脳梗塞の新規治療法として、レーザーを血栓に直接照射して溶解し、血流を再開させるレーザー血栓溶解治療システムを開発しました(図1)。

血栓性疾患である脳梗塞の後遺症による要介護の状態が社会的、医療経済学的に大きな問題となっています。脳梗塞の急性期治療薬としては、血栓溶解薬であるt-PAが世界で広く使用されていますが、多くの患者さんに使用できないのが現状です。

一方、t-PA投与によっても再開通が得られない場合や、t-PA治療の適応外の患者さんには、血管内手術により血栓を回収する機械的血栓除去術が行われています。しかしながら、それらのデバイスは器具が硬く、手術中に器具の交換が必要となるなど、安全性や操作

性に問題が残されています。

このため、本研究開発チームは、血管内皮を損傷することなく血栓を選択的に溶解する本システムの開発を進めてきました。波長500-600nmのレーザー光は血栓に吸収されますが、血管内皮ではほとんど吸収されません(図1)。

そこで、この光の吸収差を利用して、血栓のみを選択的に溶解し、且つ、血管内皮の損傷がほとんどない波長532nmのレーザー装置を開発しました。加えて、血栓にレーザーを有効に照射するための光ファイバーを内包した専用カテーテルも開発しました(図2)。

現在までに、本システムを用いて、様々な動物モデルにおける安全性および有効性を確認してきました(図3)。平成28年12月1日より、浜松医療センターにて医師主導治療を開始し、本治療法の安全性および有効性を確認していきます。

本研究開発チームは、本治療法が実際の患者さんにおいても安全かつ有効であることが確認され、急性期脳梗塞の機械的血栓除去に使用すべき第一選択の治療法となることを期待しています。

なお、本システムの一部は、国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所(NIBIO)の「平成22～26年度：先駆的医薬品・医療機器研究開発支援事業」(研究代表者：梅村和夫)による開発に引き続き、国立研究開発法人 日本医療研究開発機構(AMED)の「平成27～28年度：革新的医療技術創出拠点プロジェクト 橋渡し研究加速ネットワークプログラム」(研究代表者：梅村和夫)で国立大学法人 名古屋大学から委託を受けて開発したものです。

# 離乳期早期の鶏卵摂取は鶏卵アレルギー発症を予防する



小児科学講座 診療助教  
夏目 統

## 研究背景

10年ほど前まで、食物アレルギーの原因となる感作(IgE抗体産生)の場合は未熟な腸であると考えられたため、食物アレルギーの原因となりやすい食品は摂取を避けることが推奨されました。しかし、複数の疫学調査により感作の場は腸ではなく、湿疹のある皮膚である(経皮感作)と考えられるようになりました。

経口摂取については、感作とは逆に、免疫寛容を誘導することも分かってきたため、「離乳早期に食べさせると食物アレルギーを予防できるかもしれない」という仮説が提示されました。2015年には、ピーナッツ製品を乳児期から食べさせるランダム化比較試験(イギリス)にて、ピーナッツの離乳期早期摂取の食物アレルギー発症予防効果が確認されましたが、食べ始めるときにアレルギー症状が出現する点が問題点として残されました。今回、我々のグループでは、全員が安全に食べ始められる方法で、鶏卵の早期摂取が鶏卵アレルギーの発症予防に有効かどうかについて検証しました。

## 研究の方法

ダブルブラインドランダム化比較試験を行いました。食物アレルギーを高頻度に発症することの知られているアトピー性皮膚炎のある生後4-5か月の乳児を対象として、卵摂取群とプラセボ群に割り付け、生後6ヶ月から生後12か月まで介入を実施しました(図1)。卵摂取群では、生後6-9か月は加熱乾燥全卵粉末で50mg(ゆで全卵で0.2g換算)、生後9-12か月は加熱乾燥全卵粉末で250mg(ゆで全卵で1.1g換算)を、毎日1回摂取して頂きました。また、介入前から経皮感作を予防する目的で、アトピー性皮膚炎をきちんと治療しました。Primary outcomeは生後12か月時点の加熱乾燥全卵粉末7.0g(ゆで全卵32g(約卵1/2個分))による経口負荷試験で診断した卵アレルギーの発症率としました。

## 研究の結果

プライマリーアウトカムはプラセボ群が23/61人(38%)、卵摂取群が5/60人(8%)と有意な差を認め(p=0.001)、約8割の発症予防効果を認めました(図2)。

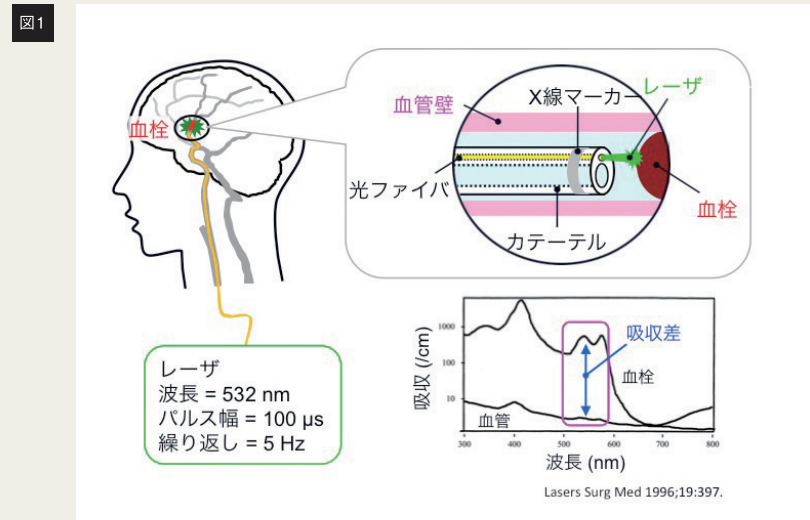
有害事象は両群で差は認めず、有害事象のために試験粉末摂取継続困難となった参加者はいませんでした。

## 研究の成果

2016年12月までに諸外国で同様の研究がいくつか報告されていますが、いずれも大量に食べることによって予防しようとする考えが根底にあるため、食べ始めにアレルギー症状を誘発してしまい、ハイリスクな子ほど予防プロトコルに乗れないというジレンマがありました。我々の研究では、予防のための摂取量を少量にすることで、安全に、かつ、有効に食物アレルギーが予防できることを明らかにすることができました。

## 今後の展開

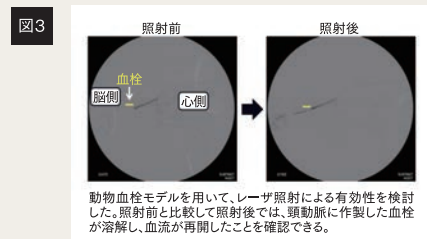
今回のプロトコルがより大規模な人数に適応しても安全かどうかの確認が必要と考えています。また、このプロトコルをより手軽に行えるように、診療ではなく、日常生活に取り入れられる方法に落とし込むことを検討しています。



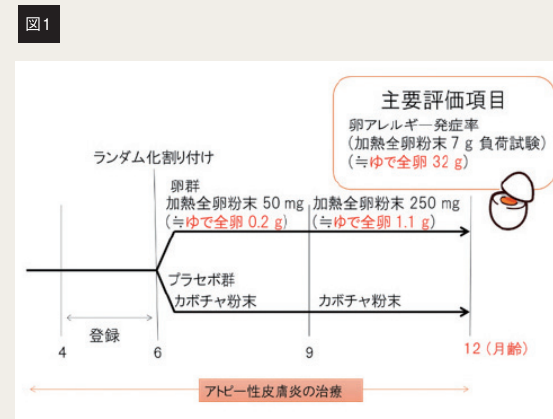
レーザー血栓溶解機構



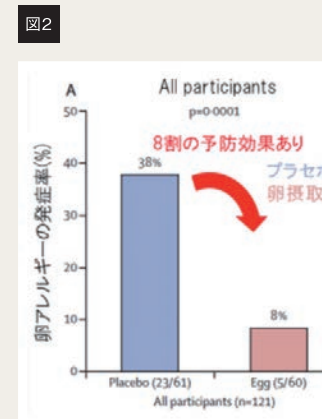
レーザーによる血栓溶解治療イメージ



レーザー照射前後のX線撮影像



試験プロトコル



結果

研究に参加して下さった参加者の方への感謝はもとより、1つの研究成果を出すためにはチームからの多くのサポートが必要なことを学びました。この場をお借りして深謝申し上げます。

**発表論文**  
Natsume O, Kabashima S, Ohya Y, et al. Two-step introduction for prevention of egg allergy in high-risk infants with eczema (PETIT): a randomised, double-blind, placebo-controlled trial. Lancet. 389, 276-286, 2017.





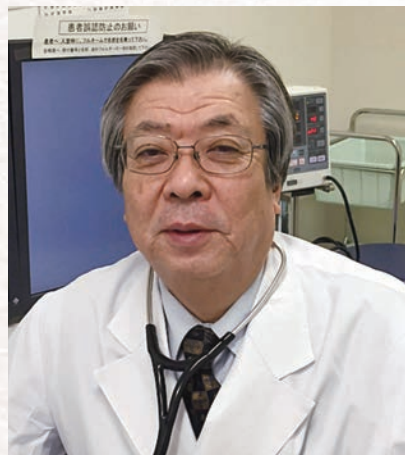
総合人間科学講座(物理学) 教授  
笹倉 裕之

## 浜松の街並みを眼下に望んで — 回想 —

8階の研究室からは雄大な自然や浜松の街並みが見渡せる。夜景は見事である。晴れた日には、遥かに広がる遠州灘を行き来する船が見える。

本学に着任したのは平成4年の10月。あれから24年以上の歳月が流れた。何ができたのだろうか？ 前任大学の学部長が退職辞令交付時に、何故、総合大学から単科の医大に移るのかと聞かれた。研究条件が悪くなるのに、と考えておられたのであろう。確かに、実験装置も無ければ研究費も少なかった。しかし、南方先生を長とした物理学研究室は和気藹々としていて、精神的に非常に楽であった。新超伝導体の創製が専門であったが、今までに多数の新物質を発見でき、世界に発信することができた。特に、放射性物質を含む超伝導物質の発見は、医学部に在籍していたメリットでもあった。また、英国を初めとした海外の専門学術誌のレフェリーを依頼されることも多くなった。

まだまだ、新規超伝導体の創製競争は続くであろう。室温超伝導体の実現されるまでは。個人的には十分に研究を楽しんだ。アイデアはまだ沢山あるが、もう、卒業しよう。多くの先輩の皆様、同僚の方々、そして事務職員の皆様、これまでのご配慮とご協力に心より感謝申し上げます。



内科学第三講座 教授  
林 秀晴

## 長い間お世話になりました

私は、昭和55年2月に山崎昇教授が主宰する浜松医科大学医学部附属病院第三内科助手として赴任しました。その後、2年間のカナダ留学、2年間弱の名古屋大学環境医学研究所時代以外は、浜松医科大学に居続けたこととなります。その間、平成3年10月には創設された浜松医科大学光量子医学研究センターの助教授として、大きな発展を遂げた光先端医学教育研究センターの初めの一步に関与できたことは嬉しい事でした。平成12年12月に浜松医科大学内科学第三講座教授に就任し、以後多くの先生のご支援とご指導を受けながら、16年以上働かせてもらったことには感謝の言葉もありません。また、平成21年に新病棟に移転して、新しい病棟で働けたのも良い思い出です。また、病院各部所との共同で創られたハートチームによるハイブリット手術室での経カテーテル大動脈弁植え込み術(TAVI)を、退任前に見ることが出来ることを期待しています。私自身が思うような成果を挙げたとは思いませんが、大学内や関連病院や医師会で活躍している諸先生は私および第三内科の誇りです。今後の第三内科の発展を暖かい眼で見守って頂ければと思います。長い間、有難うございました。

## アッと言う間の14年間

「光陰矢の如し」と言いますが、2003年4月に浜松医科大学に着任後、本当にアッと言う間の14年間でした。浜松市に来て西も東も分からず、また学内も殆ど存知あげないばかりで、生活においても仕事においてもまさに新天地での再スタートと言った感じでした。

この間、大学では教育研究評議員や大学院博士課程部会長、また病院においては手術部長や外来診療部長などの要職を務めさせていただくとともに、種々の委員会にも属し、様々な企画や日々起る諸問題について取り組ませていただきました。着任後、大学は丁度法人化の移行期でしたし、新研修医制度もスタートした頃でした。一方、2006年4月から2016年3月の間、外来診療部長を仰せつかり、附属病院は折からの新病棟建築の企画から完成までの間を過ごしました。特に、外来棟の工事は、下層階を保存し一部は稼働させながら上層階を取り崩していく難工事でしたし、多くの診療科が約1年以上に及ぶ期間をプレハブの仮設外来棟で診療していただくこととなり、その前後には2度に渡る外来診療科の大移動などでご不便をお掛けしましたが、何とか無事に終わり、今となっては非常に懐かしい思い出となっております。

最後に、浜松医科大学に奉職してからの14年間、多くの方々との出会いがあり、いろいろとご指導、ご協力たまわりましたことを、あらためて深く御礼申し上げますとともに、浜松医科大学の今後ますますの発展を祈念申し上げます。



泌尿器科学講座 教授  
大園 誠一郎



光先端医学教育研究センター  
医用動物資源支援部 准教授 加藤 秀樹

## 本学での18年を振り返って

私は1998年12月に本学に赴任しました。採用の連絡をいただいた時、実験動物中央研究所(川崎)に在職しておりましたので、山形(故郷)から遠くなるなと内心思いました。

本学での職場が動物実験施設ですので、前職で培ったハード面やソフト面での知識と経験は、これまで十分に活かされたと思っています。一方、動物実験施設は多くの教職員、研究者や大学院生が利用するサービス部門であり、着任後しばらくの間は前職では経験したことがない様々な出来事の対応に当たりました。随分戸惑いましたが、こうした経験を私自身の成長の糧にしようと開き直れた根底には前職で培われた何かがあり、それが役立つことは確かです。

大学ならではの思い出は、基礎配属の学生や卒業研究の看護学科の学生との実験です。彼らが毎年少しずつ蓄積してくれた実験の結果は、間違いなく私(たち)の研究成果の一部となりましたので、教員としての研究業績は彼らに依るところが大であります。

最後に、歴代の学長と施設長ならびに関係部局の皆様、そして、当施設職員に感謝申し上げますと共に本学の発展と教職員の皆様のご健勝を祈念いたします。



技術部 技術専門職員  
榛葉 節雄

## 人生の区切りにあたって

社会人として第一歩を踏み出した私を待っていたのは、テニス、ソフトボール、バドミントン、職員旅行など・・・中でもマラソン大会に出場するため佐鳴湖公園を日課のように走ったことを懐かしく思い出します(当初は医療センターで仕事をしていました)。

40年間の記憶から溢れ出る思い出は楽しい事ばかりでした。それまでの私には想像も出来ないほど、新しい世界が広がっていました。仕事においても一眼レフカメラで撮影し、自分で現像、研究発表の図や表などロトリング技術\*を学んで発表用スライドを作成した事も、浜松医科大学に就職しなければ経験する機会が無かったと思います。

そして、苦勞した事は英文・和文電動タイプライターで文章を作成することでした。なかなかタイプ打ちに馴染めず現在のパソコンのように打ち間違えても修正ができないので最初からやり直さなければならなかった事です。タイプライターの修正リボンが使用できたときは本当に助けられました。

言葉を交わした先生、職員、学生の方々の豊富な知識の断片を吸収させて頂き、自分自身大きく成長できたと自負しております。浜松医科大学職員であった事を誇りに思い、第二の人生へと進みたいと思います。

最後に浜松医科大学の更なる発展をお祈りし、ご指導頂きました皆様にお礼申し上げます。

※定規や製図セットを使って正確な形の文字や図表を作成すること



看護部 副看護師長  
内山 ふじ子

## 健康に感謝

平成3年4月、青森から浜松医科大学医学部附属病院に勤務することになりました。

浜松はとても暖かく、初めて4月の桜満開をみたことを覚えています。病院の庭をのぞくと、四季折々の花が毎日咲いていて、私の心を和ませてくれました。

子供の頃、父から「女性でも手に職をつけなさい。」と言われ、私は看護師として働くこととなりました。上司からのご指導とスタッフに恵まれたこともあり、今まで看護師を続けることができました。そして、たくさんの方の患者様と接してきました。元気で退院される方、治療を続けている方、治療の辛さを話してくれた方など、患者様から私自身も支えられてきました。

定年を迎えるにあたり、家族が健康であったこと、そして、私自身も健康であったことに感謝します。今まで協力して頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。



# 日独勤労青年 交流事業に参加して

学務課大学院係 鈴木 渚



# 海のむこうで

Beyond the Seas

# フィンランドへの研究留学

医学部医学科4年 南條 宏太



▲ベルリン ブランデンブルク門前

8月2日から16日までの15日間、文部科学省主催の日独勤労青年交流事業の一環としてドイツでの研修に参加してきました。「若者が活躍する社会」をテーマとして、ドイツの勤労青年との交流や企業訪問等を通し、男女ともに輝く働き方、技能の継承について学ぶプログラムです。

最初の2日間はベルリン市内で講義を受け、手工業連盟等を訪問しました。街中を歩いていると平日の昼間でも多くの人で賑わっていて、飲食店のテラス席はくつろぐ人でいっぱいでした。ドイツではフレキシブルな労働時間やホームオフィス等の多様な働き方が日本と比べて一般的ということを知ったのですが、そのような違いが街の風景にも表れているのかなと思いました。また、一人でペニーカーを押す若い男性をよく見かけました。ドイツには「親手当」という制度があり、育児休暇をとると14か月間手当が出るのですが、2か月は父親がとらなければ打ち切りになってしまうそうです。制度導入後、父親の育児休暇取得率が3%から34%に上がったという話も伺いました。

3日目から2泊3日でドイツの勤労青年との合宿セミナーが行われました。宿泊したユースホステルに隣接する女性用強制収容所跡の見学では、ドイツ団員はガイドが説明している途中でも手を挙げて、中断さ

せながら質問をされていて驚きました。説明が一区切りつくまで何人も手を挙げ続けるという光景は見たことがなく、日本人にはない積極性と、自国の歴史への関心の高さがうかがえました。ディスカッションでは「ワークライフバランス」がテーマでしたが、比較するとドイツ団員より日本団員のほうが1日の労働時間が長く、有給休暇取得率も低いという傾向がありました。それでも仕事に対する満足度が70%前後という点は共通していて、ドイツ団員が驚いていました。



▲合宿セミナー同室メンバー

6日目からはベルリンから車で5時間かけてエアフルトという街に移動し、企業訪問を行いました。服飾デザイン工房や銀行など様々な企業を訪問しましたが、中でもエアフルト大学が印象的でした。夏休みで学生の姿はあまり見られませんが、職員の働き方が日本とは大きく異なっていて興味深かったです。新卒者を一括採用して部署に振り分けるのではなく、ポストが空



▲エアフルト市内見学 地元のTV局取材にきました

いたら募集をかけるという方法で採用し、部署を超えての職員のローテーションも行われそうです。様々な分野を経験させる日本とは異なり、同じ分野の中で自分の専門をどんどん特化させていくことが重視されているという話を伺いました。



▲ニュルンベルク旧市街

エアフルトからさらに車で2時間ほど離れたニュルンベルクで、2泊3日のホームステイをしました。ホストファミリーは昨年度同事業に参加した同い年の女性で、ドイツの伝統料理と一緒に作ったり、市内観光をしたりと楽しい時間を過ごしました。通訳不在のホームステイが一番不安だったのですが、何とかしてコミュニケーションをとる度胸と積極性が鍛えられたと思います。

15日間の滞在中は本当に濃密なスケジュールでしたが、ドイツで働く同年代の人々と交流できたこと、企業訪問等によりほんの一部でもドイツ社会を自分の目で見られたことは、何にも代えがたい大きな経験になりました。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。事業参加にあたりお力添えいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

私はHOPEというサークルで、大学に来た留学生を受け入れる活動をしています。提携校からの留学だけでなく、IFMSA(国際医学生連盟)という学生主導の国際組織を介した交換留学でも受け入れています。今回はその交換留学でフィンランドの医学部の研究室に1ヶ月留学させていただきました。



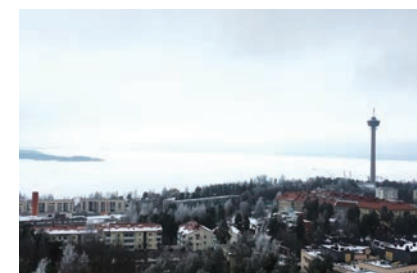
▲研究室のスタッフとモーニングティータイム。

お世話になったのはフィンランド第二の都市、タンペレTampereの大学の解剖学研究室です。と言っても、実際の研究内容は分子生物学で、特定の遺伝子や遺伝子をもとにつくられるタンパク質の正体を明かすのが主な内容です(細かく言うと、炭酸脱水素酵素とそのアイソザイムを単離・同定したり、臓器内の局在を調べたり、アイソザイムを不能にした個体を発生させて観察したりして、生体内で何に役に立っているのかを調べたりしました)。私は3年次の基礎配属では生化学的手法は経験していなかったのですが、ゲノム関係の実験を一貫して行ったり、脊椎動物を実験体に使うのはほぼ初めての経験でした。できれば実験を自分で組み立てるところまでやってみたかったのですが、期間の関係でできませんでした。

また教授や他のスタッフは非常にフランクな方たちで、毎日朝の出勤後は紅茶をいただきながら休暇中の話などを話しました。日本と違って学生も研究室スタッフも国籍は様々で、実際私のいた部屋ではインド人2人、アメリカ人1人、現地ハーフ1人でした。そのおかげか研究室では多くが英会話で、街

中もほとんど英語が通じました(フィンランド語はおそろしく難しかったです)。一度修士課程の院生のための論文執筆講座に参加したときも、授業はすべて英語なのに平然とノートをとる学生のレベルに驚きました。

ところで3月のフィンランドと言えば、ムーミンで有名な雪国です。私が行ったときは一面雪で手袋・帽子なしでは20分以上外出できないくらいの氷点下気温で、日本どころか静岡育ちの私にはもはや雪国というより氷国でした。一方、施設内は暖房が強く20℃程度だったのでうっかり雪を落とさず建物に入るとコートが水浸しになってしまいました。そんな寒さもあり、また博物館・図書館どこにもカフェがあるので、ずいぶんカフェに助けられました(現地の方も頻繁に紅茶を嗜みます)。幸いにも研修終わりの頃には雪(と氷)が融けてきてフィンランドの2つの顔を見られました。



▲高い塔に登って撮りました。林の向こうに映っているのは雪のつまった地面ではなく凍った湖面。

せっかくなので夜は外に出てレストランで食事することが多かったのですが、意外とヨーロッパ以外の人もいるのでベジタリアン料理やアジア料理、なんと寿司屋もありました。北欧ということで私はおいしいトナカイ料理を何度か頂きました(くさみが強めな独特の味です)。物価が高いのが玉に瑕でしたが...



▲現地の医学科1年生と共に。



▲なかなかお目にかからないトナカイ。

研修終了後には首都ヘルシンキを観光し、他の北欧の国もまわって、同じ北欧でも通貨も違えば歴史も異なる国だとよくわかりました。特に印象深いのはヘルシンキの離島スオメンリンナで、北欧と西欧とロシアの間に位置する要衝としてのフィンランドの歴史が島中に残されていて、日本人が全く知らない歴史が垣間見られました。



▲ヘルシンキの離島スオメンリンナにて。軍事要衝だったことを示す大砲

今回の留学を通して、日本人が受けている科学教育が、決して世界共通のものではないことを実感しました。今回の留学に理解と協力をして下さった理事や先生方、現地のスタッフ、HOPE幹部と家族に感謝しています。



10月

10月1日(木)  
入学式

大学院医学系研究科(博士課程) 10月入学式が行われ、留学生2名が入学しました。

10月26日(水)  
学生との意見交換会

学生自治会と各サークルの代表者を集めて「学生との意見交換会」を開催しました。

10月27日(木)  
解剖体慰霊祭

ご遺族、ご来賓、白菊会会員、新天会会員、教職員と学生約420名が参列し、解剖体慰霊祭を執り行いました。医学の発展のため、ご遺体を解剖に献体された故人の御霊に対し、感謝と哀悼の意を表し黙祷しました。



10月31日(月) 消防訓練

附属病院6階東病棟で平日昼間に火災が発生したことを想定し、火災発生時の初動態勢の確認と通報連絡、初期消火、避難誘導等の訓練を実施しました。教職員約160名が参加しました。



11月

SD  
「救命救急講習会」

学務課・入試課・学術情報課の職員を対象に救急災害医学講座の吉野篤人教授を講師として、BLS(一次救命処置)のうち、胸骨圧迫による心肺蘇生法とAEDの使い方を、3人1グループを組んで実習しました。



11月1日(火)～2日(水) 外国人留学生実地研修旅行  
外国人留学生と研究者を対象に、鎌倉・箱根への研修旅行を実施しました。鎌倉高徳院や箱根関所などを訪れ、日本文化への理解を深めました。

11月

11月5日(土)～6日(日)  
医大祭  
「Growing Up!」

医大祭実行委員会主催により第41回医大祭を実施しました。特別講演では聖隷浜松病院小児神経科主任医長 岡西徹先生に「これから医師になる君達に贈るキャリアパス論」をご講演いただきました。



11月10日(木) 動物慰霊祭

動物慰霊塔前で、約100名の教職員が参列し、動物慰霊祭を挙行了しました。

11月17日(木)  
永年勤続者表彰式

永年勤続者表彰式が執り行われ、教職員9名が勤続20年の永年勤続者表彰を受けました。



11月25日(金)  
クリスマス  
イルミネーション  
点灯式

市内の民間企業4社の協賛によりクリスマスイルミネーションが点灯されました。点灯式には、小児科入院中の子どもたちも参加して、にぎやかに開催されました。

12月



12月9日(金) クリスマスコンサート  
学生管弦楽団によるコンサートを開催し、患者さんやご家族が集まりました。

12月19日(月)  
看護学科卒業研究発表会

看護学科4年生による卒業研究発表会を行いました。



12月

12月20日(火) 学生表彰

課外活動、社会活動及び研究活動において、特に顕著な成績を収めた学生団体に対し、今野学長から表彰状を授与しました。



**課外活動** サッカー部  
弓道部(男子)  
陸上競技部 磯部 貴之、水島 恵友、友田 敦也、林 暁利

**社会活動** 四つ葉  
奇術部  
災害支援サークルLuce  
菊池 優志・中本 比奈奈・稲葉 和真

**研究活動** 大野 航・森 亘平・橋本 優子  
本間 侑  
坂井田 佳奈

情報セキュリティ講演会及び  
個人情報保護管理研修会

情報基盤センター 谷重喜センター長が「さらに巧妙化する情報搾取手口」と題して情報セキュリティ講演を行いました。また「個人情報保護法～改正点における課題～」と題して総合人間科学講座(法学)大磯義一郎教授による個人情報保護管理研修会講演を行いました。133名の教職員が受講し、個人情報に対する認識と理解をより深めることができました。

12月27日(火) FD講演会

教育活動の一環として、大学入試センター 山地弘起 教授による「学生がやる気になるアクティブ・ラーニング」と題した講演を行いました。能動的な学修への参加を取り入れたアクティブ・ラーニング形式での研修を体験することでその理解を深めました。



1月

1月4日(水) 新年交礼会

今野弘之学長から「第3期中期目標期間が始まり、教育・研究・診療の観点から、既に実行しているものも含め、課題として進めていかなければならない取り組みがあります。いずれも皆様のご協力があるとのこと、本年もよろしくお願いいたします。」と年頭の挨拶がありました。



1月20日(金)  
共用試験  
医学系CBT

医学科4年生に、共用試験医学系CBTを実施しました。共用試験医学系CBTは、臨床実習開始前までに修得しておくべき医学的知識を評価する試験で、全国の大学で行われています。

1月30日(月)  
第11回サイエンスのつどい

光先端医学が照らすサイエンスシリーズ第2弾(図書館・光先端医学教育研究センター共催)「次世代シーケンサーによるゲノム医療の実現」と題して、医化学講座 才津浩智教授による講演を行い、気軽な雰囲気の中で科学について語り合いました。



1月31日(火) 看護学科学生との意見交換会

看護学科2年生～3年生を対象に、早期から就職について考える機会を提供するとともに、学生委員会教員、看護学科教員と学生生活全般に関する意見交換を行いました。

2月

2月18日(土)  
共用試験医学系OSCE

医学科4年生に、共用試験医学系OSCEを実施しました。試験は実技形式で行われ、技能と態度が評価されます。

2月21日(火)  
消防訓練(夜間想定)

夜間に附属病院6階西病棟で火災が発生したことを想定して、消防訓練を行いました。訓練終了後に、水消火器による消火訓練、スモークハウスによる煙体験を実施しました。

2月2日(木)  
大学院修士課程  
(看護学専攻)  
公開研究発表会

修了予定の大学院生21名が、修士論文等の研究発表を行いました。

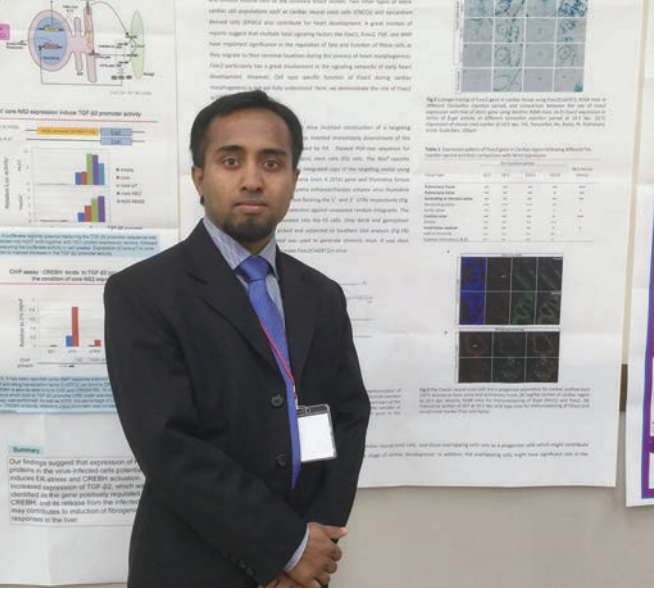
2月22日(水)  
FD/SD研修会・学校保健講演会・  
学生指導担当者研究会 講演会

全職員を対象に広島大学 アクセシビリティセンター 山本幹雄准教授による障害者差別解消法における「大学における合理的配慮と支援制度～広島大学の事例から～」と題した講演を行いました。

2月25日(土)～26日(日)  
浜松医科大学入学者選抜試験

平成29年度浜松医科大学入学者選抜試験(前期日程)を実施しました。





## 留学生の紹介

浜松医科大学で学ぶことができ、  
本当にラッキーだと思います

International Student Introduction

大学院医学系研究科(博士課程)4年 医化学講座

Amin Mohammed Badrul

(アミン・モハマド・バドル)

出身国

Bangladesh



### Research theme

I am a fourth year PhD student in the Department of Biochemistry, and doing research under the supervision of Prof. Hiroto Saito. I have just completed my Doctoral dissertation defense few days ago. My research interest includes identification of diseases caused by genetic mutation. My PhD work is to investigate the role of a transcription factor, Foxc2 in some vital organs like eye, kidney and cardiac system. I am currently working on the mechanism of gene functions involved in epileptic seizure.

### What did you study before coming Japan?

I completed my Bachelor's and MS degree in Biochemistry and Molecular Biology from University of Dhaka in 2006 and 2007, respectively. After completion of my study, I worked as a research officer and later promoted as senior research officer at international research organization named icddr,b. From there, I have actually been

### 研究テーマ、研究の 成果を教えてください

私は大学院博士課程4年生です。医化学講座で才津浩智教授のご指導の下、研究を行っています。数日前に博士論文の審査を終えたばかりです。

私の研究の興味は遺伝子変異による疾病の同定を含みます。博士課程の研究内容は、眼、腎臓、心臓循環器などの重要臓器における転写因子Foxc2の役割の解明です。今はてんかん性発作に関与する遺伝子機能のメカニズムを研究しています。

### 日本に来るまでは 何を勉強していましたか？

ダッカ大学で生化学と分子生物学を学び、2006年に学士号、2007年に修士号を取得しました。その後、国際下痢症研究センター(icddr,b)で研究官として働き、昇進して調査官となりました。icddr,bで働くようになってから、研究に従事する専門職に強く関心を持つようになりました。

fascinated by the research oriented career.

### Your original country and its education system

I am from Dhaka city, the capital of Bangladesh. It is one of the most populated city in the world. Many offices of international corporations and business facilities have made Dhaka more popular to all Bangladeshi people. The world longest sea beach known as Cox's Bazar and largest mangrove forest called Sundarbans are the most beautiful places in Bangladesh. Many foreign tourists come to these places to enjoy the natural beauty of Bangladesh. The education system in Bangladesh consists of three levels; primary level(class 1-8), secondary level(class 9-12) and tertiary level. Many public and private universities provide education opportunity for the tertiary level.

### Why did you choose HUSM?

Most sophisticated researches are going on with fame in Japan. Besides, Japan-Bangladesh

### Bangladeshの教育について 教えてください

私は Bangladeshの首都ダッカの出身です。世界で最も人口の多い都市のひとつであるダッカは、世界各国の企業が事業展開しており、 Bangladesh人の中でも人気の都市です。 Bangladeshで最も美しい場所は、世界最長の海岸線コックスバザールと mangroveの群生地帯シュンドルボンです。多くの外国人観光客が訪れ、 Bangladeshの自然の美しさを満喫しています。

Bangladeshの教育システムは3段階で構成されており、初等教育(1~8年生)、中等教育(9年生~12年生)終了後、公立または私立の大学で教育を受けることができます。

### 浜松医科大学での 研究を選んだ理由は？

日本の最先端の研究は有名です。また、 Bangladeshは独立当初から日本と友好関係を維持していることもあり、私は日本の大学への進学を決めました。浜松医科大学のホームページを見て、生化学講座の三浦直行教授に連絡をしました。三浦教授は私にとっても好意的でした。

have consistently maintained friendly relations from the very beginning of independent Bangladesh. Therefore, I decided to pursue my higher education in Japanese university. I have been informed about HUSM from the website. Consequently, I was corresponding to Prof. Naoyuki Miura, Department of Biochemistry who was very much positive towards me.

### How is your life in Hamamatsu?

Life in Hamamatsu is very much unlike to my original country. Here is very calm and quiet atmosphere which is really wonderful for living. My dormitory is very close to university. So, I feel much more comfortable to work in the lab without transportation problems. Here, I have experienced Japanese culture, manner and food habits. The natural beauty of Hamamatsu impressed me a lot. I also enjoy the badminton with the international students at HUSM's gym. I am very much lucky studying here. I'll really miss a lot Hamamatsu life while returning my country.



▲Lab party with Prof. Saito  
才津教授と医化学講座の食事会

### 浜松での生活はどうか？

浜松での生活は、私の母国とは全く異なります。穏やかで、生活するにはとても素晴らしい環境です。国際交流会館は大学に近いので交通手段に困ることもなく、快適に研究に打ち込むことができます。日本の文化、習慣、食生活を経験し、浜松の豊かな自然に心を動かされました。また他の留学生と体育館でバドミントンをして楽しんだり、浜松医科大学で学ぶことができ、本当にラッキーだと思います。 Bangladeshに戻ったら、浜松の生活をとても懐かしく思うでしょう。

## シミュレーション研究会

Hamamatsu Medical Simulation Training-ship (HMST)

### 設立

2012年

### 部員数

30名

### 活動日程

週2回(水・金)練習



### 学生間での学習による医療手技の向上

私たちHMSTは、臨床実習で実際に患者と接する前に、医学シミュレータを用いて基本的な医療技術を習熟することを目的に活動しています。普段の活動では、大学病院のシミュレーションセンターで、エコー、聴診、蘇生救急、腹腔鏡、内視鏡、婦人科、小児救急およびマイクロサージェリーのシミュレータを用いて、実習前の低学年の時期から医療手技のトレーニングをしています。

また、学習した医療手技をより多くの人に役立ててもらう為に、

Peer learningと親子セミナーという2つのワークショップを行っています。Peer learningは年に1回、臨床実習前の有志を対象に、医療手技を習熟した会員学生から、シミュレータ未経験の学生に技術を伝えています。この内容を更に周知するために、学会で発表もしています。

親子セミナーは地域貢献の一環として、静岡県内の小学校高学年の生徒たちとその親御さんを対象に早くから医学への志を育ててもらうために、楽しく医療手技を体験してもらう企画です。

どちらのワークショップも先生から技術を学んだ学生が他の学生や子供たちに伝えていく屋根瓦方式の学習を進めていくことから、私たち会員学生自身の学びの動機付けにも繋がり、普段の活動にも熱が入ります。

## CLUB Introductions

サークル紹介

## 剣道

Kendo

### 設立

1975年

### 部員数

約26名

### 活動日程

週3回(月・水・金)練習



### 剣道部の活動について

こんにちは。浜松医科大学剣道部です。私たちは月曜、水曜、金曜の週3回、17時から19時に練習しています。部員数はプレーヤー19名、マネージャー7名です。剣道は初心者には難しく、大学から始めにくい印象があると思いますが、そんなことはありません。浜松医科大学剣道部には、初心者も多数在籍しており、みんなで楽しく練習しています。練習内容は素振り、足さばきなどの基本的なものから、部内試合などの実践形式なものまでさまざまです。現在は学内に指導者がいないので、部員同士で互いにアドバイスしながら練習しています。その他にも、週1回もしくは2回、付近

の道場に出稽古に行き、先生方に指導して頂いています。また月1回程度のペースで東海地方だけでなく、関東や関西方面の練習試合・公式戦に参加しています。

ここ最近では、中部医歯薬剣道大会にて男子団体3位、男子個人3位入賞。医学部だけでなく全学も参加する東海地区国立大学体育大会にて男子個人で3位に入賞などの結果を残しています。

部内のイベントとして、遠征ついでの小旅行やコンパなどで男女学年を超えて仲を深めています。剣道部に興味のある方は、ぜひ練習の様子を見に武道館に足をはこんでください。部員一同心待ちにしています。



医学部医学科3年

薄田 暁



PRIZE WINNERS

# 学会賞等受賞

賞の名称	受賞年月日	受賞者	受賞内容(研究題目)
日本比較生理生化学会 第38回大会 発表論文賞会長賞	平成28年 9月4日	医学部医学科2年 坂井田 佳奈	A modified "NanoSuit" preserves living eukaryotic cells in FE-SEM.
日本早期認知症学会論文賞	平成28年 9月17日	臨床看護学講座 教授 鈴木 みずえ	タクティールケアの心理・生理機能に及ぼす効果 :心理尺度・脳波・心拍変動を用いた評価
日本医療薬学会 平成28年度 Postdoctoral Award	平成28年 9月18日	薬剤部 薬剤主任 山田 尚広	ポリコナゾールのNオキシド化の代謝飽和は、臨床用量におけるポリコナゾールの非線形薬物動態を引き起こす
第26回日本医療薬学会年会 優秀演題賞	平成28年 9月18日	薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 佐藤 聖 内藤 隆文 石田 卓矢 川上 純一	がん悪液質の病態時における血清IL-6の 濃度上昇とオキシドンの血中動態および 中枢症状発現との関係
第26回日本医療薬学会年会 優秀演題賞	平成28年 9月18日	薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 薬学部 薬用加 志田 拓顕 内藤 隆文 柴田 海斗 川上 純一	定量的標的プロテオミクスによるデノスマブの ヒト血清中濃度測定法の確立
第21回日本糖尿病教育・看護学会 学術集会 JADEN 21st AWARD	平成28年 9月18日	看護部 副看護部長 鈴木 智津子	1年の透析予防指導プログラムに参加した糖尿病 腎症3期患者に変化が現れた要因
第46回日本人類遺伝学会賞	平成28年 10月8日	小児科学講座 教授 緒方 勤	小児先天性疾患の臨床および分子遺伝学的研究
第14回日本サルコイドーシス/ 肉芽腫性疾患学会 千葉保之・本間日臣記念賞	平成28年 10月8日	臨床薬理学講座 准教授 乾 直輝	サルコイドーシスの病態に関する多面的な評価
第135回日本薬理学会関東部会 優秀賞 Young Investigator's Award	平成28年 10月8日	大学院医学系研究科(博士課程)4年 専攻人科学講座 浅野 有希子	マウス胚由来ウロキナーゼ型プラスミノゲンアクティベーター の酵素活性検証のための線溶を利用した実験法の確立
第43回日本神経内分泌学会 学術集会 若手研究奨励賞	平成28年 10月14日	大学院医学系研究科(博士課程)4年 内科学第二講座 大川 雄太	妊娠中の低栄養ストレスがGABAを介して HPA-axisに与える影響
ドイツ皮膚科学会名誉会員	平成28年 11月	皮膚科学講座 教授 戸倉 新樹	ドイツ皮膚科学会が授与する皮膚科学貢献者に 対する名誉会員証
台湾皮膚科学会 Professor Lu Yau-Chin Memorial Lectureship	平成28年 11月12日	皮膚科学講座 教授 戸倉 新樹	台湾皮膚科学会が授与する外国人皮膚科学研究者 に対する賞
第58回日本手術看護学会 東海地区学会看護研究発表会 最優秀賞	平成28年 11月12日	看護部 看護部長 看護部 看護部長 看護部 看護部長 看護部 看護部長 看護部 看護部長 看護部 看護部長 小杉山 友里 中村 泰江 須山 喜代美 岡 美帆 高松 愛美 川島 知晃 中根 瑠美	アクションカードと被災時のチェックリストを用いた 机上型防災訓練
平成28年度秋季静岡産科婦人科学会 学術集会 奨励賞	平成28年 11月27日	産科婦人科 医員 南波 美沙	妊娠初期の帝王切開痕部に対して、子宮内容吸引 除去術をフォーリーカテーテル留置による圧迫止血を 行った2例
日本表面科学会 技術賞 SSSJ Technique Award	平成28年 11月30日	総合人間科学講座 (生物学) 教授 総合人間科学講座 (生物学) 特任助教 針山 孝彦 高久 康春	ナノスーツ法による生きたままの生物の SEM内生態観察
第56回日本臨床化学会年次学術集会 Young Investigator Award	平成28年 12月3日	検査部 臨床検査技師 山中 勝正	サイトカインによる気道IL-17C発現制御の検討
第37回日本臨床薬理学会 学術総会 優秀演題賞	平成28年 12月3日	大学院医学系研究科(博士課程)3年 内科学第一講座 鏡 卓馬	Esomeprazole/vonoprazan併用のclopidogrel 及びprasugrelの抗血小板作用への影響
第13回日本アレルギー学会 学術大会賞	平成28年 12月16日	内科学第二講座 特任助教 鈴木 勇三	慢性好酸球性肺炎の長期予後の検討

## 公開講座

## ズームイン

本学では毎年大学の夏休み期間中に、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。

今年度は「役に立つ最新医療のお話」をテーマに、3日間(各日2講義)合計6講義を実施しました。  
そのなかから特に人気のあった講義をピックアップしてご紹介します。

# 「歯なしにならない話」 ～年齢とともに変わる口腔ケアの重要性～

食事は日頃の生活の欠くことのできない行為で、  
いつまでも自分の歯でかめることは大きな幸せです。  
しかし、悲しいことに加齢と共に歯は一本一本と減る運命にあります。  
これからの人生で如何に自分の歯とつきあっていくかは大きな問題です。



歯科口腔外科 病院准教授  
長田 哲次

### 口の中の汚れを落とし清潔に保つ 口腔ケアはどうして大切なのか?

#### ①虫歯と歯周病の予防

若いときは虫歯で、歳を重ねるとつれづれ歯周病で歯を失うことが多くなります(図1)。これ以上歯を失わないために、今からでも遅くはありません、しっかり口腔ケアを行い少しでも長く自分の歯でかめる口の中に中を維持しましょう。

#### ②全身疾患の予防

近年、口の中の細菌がもたらす全身への悪影響が明らかになりつつあります。口の中の細菌を肺に落とし込むことで誤嚥性肺炎になることは知られていました(図2)。歯周炎の歯をかむことで歯の周りの細菌が血管の中に押し出され全身に回り、その結果、様々な病気の原因になることが分かってきました(図3)。つまり歯周病を治療することでこれらの病気になりにくくできるのです。

#### ③術後期口腔ケア

がんの手術・臓器移植・心臓血管手術を行う前に口腔ケアを行うことで、術後の肺炎・癒合不全・感染をある程度抑制で

きます。また、がん患者の化学療法・放射線治療に平行して口腔ケアを行うことで、口内炎を軽減できます。ステロイド・骨吸収調整剤・抗てんかん薬……これらの使用にあたり、口腔ケアを行うことで治療による副作用を抑え、疾患の治療の手助けになります。

### 口腔ケアの実際

#### ①最初は歯科受診

～歯は見かけによらぬもの～

歯周病による歯槽骨の吸収はレントゲン写真でないとわかりません。また、歯の表面の汚れが石灰化した歯石は歯科医院の専用の器械で取り除く必要があります。

#### ②ブラッシングは口腔ケアの基本

虫歯や歯周病はすべて口の中の細菌が引き起こしています。それらの一部が歯の周りに付着しプラークという塊を形成します。この汚れを落とすこと(ブラッシング)が基本的な口腔ケアです。歯ブラシは普通か柔らかめ、大きさは自分の奥歯(臼歯)より少し大きいくらいで、鉛筆を持つように軽く握り、歯の際に当て細かく振動させて汚れを落とし

ます。歯の隙間にブラシの毛先を滑り込ませる要領です。歯ブラシは毎食後にしましょう。

#### ③専用の道具で楽にケア

歯間ブラシは歯と歯の間など歯ブラシの毛先が届きにくいところに使います。フロスは歯と歯がしっかり接触している部分(歯間部)に使います。年を取ると「見えない」「うまく磨けない」「面倒くさい」と口腔ケアがおっくうになるのも事実です。そこで、最近では優れた電動歯ブラシが出ており、是非一度試されてみては如何でしょうか。

### 高齢者に見られる口腔がん

全体のがんと比較すると頻度は決して高くありませんが、60歳を過ぎると口腔がんが多くなります。高齢化社会に向けて、今後口腔がんは増加すると考えられます。肺がん、胃がん、大腸がんなどの他のがんとは違い、口の中は自分で見たり触ったりすることができます。口腔ケアを行うときに口の中をよく観察しましょう。

図1 年代別にみた歯を失う原因

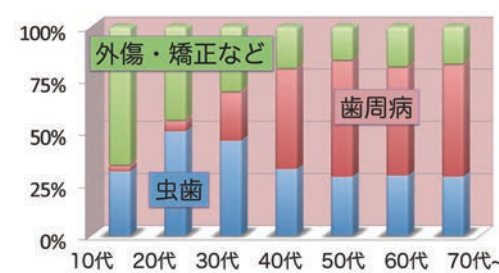


図2 口腔ケアと肺炎発症率

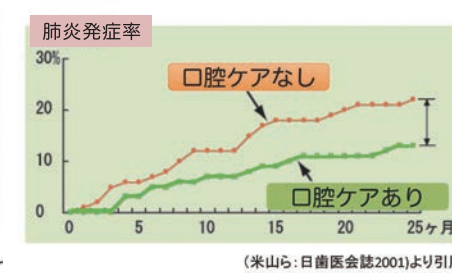
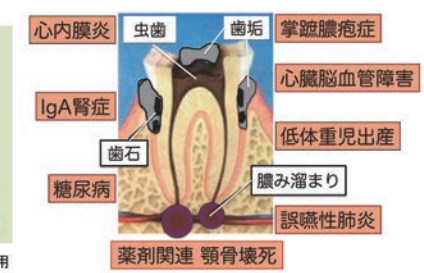


図3 虫歯と歯周病の影響





## 第12回日本股関節鏡研究会

整形外科科学講座 准教授 星野 裕信

9月3日(土)にアクトシティ浜松にて第12回日本股関節鏡研究会を主催させていただきました。参加者100名弱の小さな規模の研究会ですが、股関節鏡という関節の内視鏡を使った治療に特化した研究会であり、日本における股関節鏡手術手技の普及と発展をよりすすめていこうという目的で設立され、日本全国からこの治療に関するエキスパートが集い、朝8時30分から夕方17時まで活発な議論が行われました。股関節鏡視下手術は日本でも限られた施設でしか行われていない治療法ですが患者数は意外に多く、特に股関節唇損傷、寛骨臼大腿骨インピンジメントといった比較的新しい概念の疾患に対する治療法として脚光をあびてきました。平成28年度の診療報酬改定により関節鏡下股関節唇

形成術が保険適用となり、今後益々股関節鏡視下手術が増加していくことが予測されます。当科でも2000年からこの治療法に取り組んでおり、診断がつかず治療に難渋していた数多くの患者さんを治療してきました。今回のテーマは「治療成績の向上をめざして～術式とリハビリの工夫」としました。股関節鏡視下手術は細かい手技が必要であり、治療成績の向上のためにはさまざまな工夫が必要となり、術後のきめ細かいリハビリテーションが術後成績に影響してきます。本研究を浜松の地で開催できたことは大変有意義であり、今後もっと多くの研究成果を浜松から発信していきたいと思えます。



## 日本産業看護学会第5回学術集会

地域看護学講座 教授 巽あさみ

11月5日(土)、6日(日)の2日間にわたり、「日本産業看護学会第5回学術集会」(学術集会長:巽あさみ、聖隷福祉事業団 鳥羽山睦子)を浜松市のアクトシティ浜松コングレンスセンターにて開催しました。全国から272名が参加し、盛会裡に終了しました。メインテーマを「人もこころもつなぐ架け橋の創出～産業看護における可能性の追求～」としました。また、会長講演はメインテーマに沿った「つなぐ・創出」活動ができる産業看護職を育成するために「大学における産業看護職の育成の視点から」と「現場力の強化と産業看護活動の質の向上」とし、基礎教育や卒後教育について産業看護学教育の体系化や標準化が急務であることが共有化されました。基調講演では「産業保健・看護におけるソー

シャルキャピタル)について尾島俊之先生にご講演いただきました。3つのシンポジウムでは「ストレスチェック」などテーマごとに、産業保健師、産業医、心理職、経営者、労務人事担当者など多職種の発表後、産業看護職の果たす役割についてフロアを交えて熱心な議論が交わされました。ワークショップは産業看護職が行う職場巡視や作業環境測定の体験演習を交えた実践的な内容でした。一般演題は27題の発表があり、今回新たな試みとして優秀発表者の表彰を行いました。

日本産業看護学会は今年、設立後5年の節目を迎え、発表演題数の増加や学会参加者の積極的な姿勢等から少しずつ成熟している手ごたえを感じました。



## 第4回日本シミュレーション医療教育学会学術大会

臨床医学教育学講座 医学教育推進センター シミュレーションセンター 特任准教授 五十嵐 寛

9月24日(土)第4回日本シミュレーション医療教育学会学術大会を浜松医科大学で開催しました。

学会は、医学史研究者として著名な本学麻酔科蘇生科講師牧野洋先生企画公演「医学シミュレーションの黎明期」で開始されました。

大会テーマは「シミュレーション教育 技術と心」としました。

**技術:**人口の都市部集中に加え超高齢社会を迎えようとしている現在、地方の医療を維持するためにICTを活用した遠隔地医療:Telemedicineが目ざされております。Telemedicineのノウハウを教育に活用した「Tele-Simulation」を浜松医科大学と島根大学医学部(出雲市)の二元中継で実演しました。

**心:**シンポジウム「教育心理学を活用した学習者支援」

では、基調講演「モチベーションの心理学と脳科学」を本学心理学教室准教授田中悟志先生に、学習心理学と関連する教授システム学を駆使して教育の第一線でご活躍のシンポジスト3名には、学習者の心に焦点をおく学習者支援に関して語っていただきました。

一般演題は48演題、参加登録者は177名と、共に過去最多を記録する事が出来ました。また、大会前日にプレカンファレンス「なるほどTheシミュレーション」、翌日にはポストカンファレンス「第14回次世代医学教育研究会」を合わせて開催し、全国からシミュレーション教育の同志が集い熱く語り合う事の出来た3日間となりました。



## 第39回日本小児遺伝学会学術集会

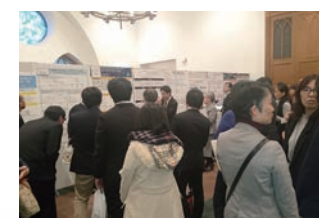
小児科学講座 教授 緒方 勤

日本小児科学会の分科会である日本小児遺伝学会の学術集会を、12月9日(金)～10日(土)、慶應義塾大学三田北館ホールにおいて開催しました。本学会は小さな学会で、日本小児科学会の時期に同時開催されておりましたが、今回から独立した分科会の学術集会として、初めて2日間の期間で開催され、過去最大の206名の参加者と61の一般演題が集まりました。

主な内容です。特別講演は、「Mirage症候群:表現型考察から新規遺伝子同定、そして機能解析まで」(長谷川奉延先生)、小児遺伝学シンポジウムは、「小児遺伝と希少疾患研究」(松原洋一先生)、「小児遺伝と倫理」(福嶋義光先生)、「小児遺伝と小児慢性特定疾病・指定難病制度」(小崎健次郎先生)、小児遺伝と最新技

術のセッションは、「次世代シーケンサー」(才津浩智先生)、「iPS細胞」(赤松和土先生)、New Syndrome Sessionは、「Kagami-Ogata症候群」(鏡雅代先生)、「Takenouchi-Kosaki症候群」(武内俊樹先生)、Ehlers-Danlos症候群 Kosho type(古庄知己先生)、若手シンポジウム:英文論文を書こうのセッションは、黒田友紀子先生と永田絵子先生で、素晴らしい講演でした。そして、懇親会では、施設紹介や小児遺伝クイズで楽しいひとときを共有しました。

小児遺伝学会の学術レベルの向上には目を見張るものがあり、今回の学術集会は、今後の本学会の発展を予感させるものとなりました。とても楽しい学術集会でした。



## The 1st joint meeting of ISFP and PA workshop

医生理学講座 准教授 鈴木 優子

(第1回合同国際会議;第23回国際線溶学会/第16回プラスミノゲン活性化ワークショップ)

10月17日(月)～21日(金)の5日間にわたり、「風景美術館」こと日本平ホテルにて第1回目の記念すべき合同国際会議を浜松医科大学医生理学講座が主催しました(大会長:浦野哲盟、事務局長:鈴木優子)。由緒ある二つの国際学会が、これまでは隔年交互に開催されてきましたが、対象分野も重複することから今回一つの国際会議として企画しました。約150名(半数以上が外国人)の基礎研究者から臨床医までが集い、静岡の絶景を眺めながら、血栓溶解のしくみやその治療、また血栓を溶かす酵素であるプラスミンが引き起こす様々な反応として感染症・がんの浸潤転移・神経系や血管系への作用など、最新の研究成果をもとに交流を深めました。

学術のみならず、雨上がり後の澄み切った青空に映える富士山の姿に海外の方々とともに感慨に浸り、コングレスパーティーでは日本ならではの手筒花火のアトラクションを楽しみました。またコングレスツアーではもくもくと煙をあげる箱根の大涌谷へと足を運び、海外参加者の皆さんに日本の魅力を最大限伝えることもできました。本学はじめ、静岡市、企業・法人、また多くの個人の方々からの多大なるサポートをいただき心より感謝いたします。



## 第16回 慶北－浜松合同医学シンポジウム浜松会議

12月15日(木)、本学多目的ホール、臨床講義棟大講義室及び中講義室、看護学科棟にて、慶北大学校医科大学・看護大学(韓国)と合同医学シンポジウムを開催しました。

この合同医学シンポジウムは、学術交流協定校である慶北大学校医科大学・看護大学と本学が平成13年より毎年交互に当番校となり開催しています。シンポジウムを通じて活発な意見交換を図ることにより、両大学が協力し、医学の発展に大きく寄与することを目的としています。

第16回目となる今回は10月の開催予定でしたが、台風接近のためやむなく中止となりました。しかし慶北大学校医科大学・看護大学の強い要望により、12月に日程を改めて開催する運びとなりました。慶北大学校医科大学・看護大学からは25名、本学からも多数の教員と学生が参加し、活発な意見交換が行われました。特に大学院生には今後国際学会等で発表していくうえでよい経験となりました。





# 卒業生は今



あいち小児保健医療総合センターでは、12月に院内で盛大なクリスマス会を行いました。私もクリスマス実行委員として携わり、運営のお手伝いをしました。▶

▼保健師は地下一階の「保健室」に駐在しており、多岐にわたる活動を行なっています。



看護学科12期生  
(平成22年 3月卒業)  
前野 佐都美

## 保健師としての新たな挑戦



域での「生活」の部分に目を向けるようになりまして。そんな中、「自分自身はこれからどう在りたいのだろう」という思いがふと頭をよぎるようになりました。「一度立ち止まってみよう」、私は附属病院を離れる決意をしました。そして半年間の就職活動を経て、あいち小児保健医療総合センターでの保健師という仕事に巡り合いました。

保健師として働き始めて半年。経験豊富な4人の保健師に囲まれながら、楽しく働いています。私達の仕事は、病気を抱える子ども達やその家族への精神的支援が主な活動です。各保健師が病棟と愛知県内での担当地区を受け持っています。病棟や外来へ出向き、患者さんやご家族とお会いして、心の中に溜まった気持ちを吐き出せるような場づくりをしています。「少しでも心が軽くなってもらえたら」、私はいつもそのような思いで患者さん達と関わっています。お子さんが抱える疾患も様々ですが、家庭環境、経済的状況、ご家族の健康状態など多方面の視点から捉え、支援が必要と感じる方へ積極的に声を掛けるようにしています。しかし病院での支援に力を注ぐのみでは、それはとても断片的なものです。そのため地域の保健師とも連携をとり、地域と医療機関が一丸となってその方々の継続的な支援を考えていける体制づくりをしています。私達の仕事は決してすぐに効果が見えるものではなく、とても地道な



▲浜松医科大学附属病院の小児科で出会った仲間達。沢山の尊敬する先輩、同期、後輩達との出会いがありました。

仕事かもしれません。しかし保健師が一人でも味方であること、辛い気持ちを吐ける場所があること、それがご家族の心の健康の維持、また何よりも子ども達への虐待予防へも繋がっているのだと信じて日々活動をしています。その他にも、子ども達の不慮の事故で悲しむ方が少しでも減って欲しいとの思いから「事故予防教室」を定期的に行ったり、予防接種の相談や啓発活動、肥満傾向児に対する健康スクール、育児電話相談、遺伝相談等、多岐にわたる活動を行っています。

私はこれまで看護師として働く中で患者さんと一緒に悩んだり、考えたりする時間が一番好きでした。また、今でもそれは変わりません。これからも大切にしていきたいこと、それは「どんな時でも患者さん、ご家族、目の前にいる相手が主語であること」です。これからも様々な分野に積極的に挑戦し、困っている誰かのために少しでも精一杯返していければと思います。

▼STAND UP!!で毎年発行している若年性がん患者さんのための体験談等を含むフリーペーパーです。毎年3万部、全国350病院に配布しています。



医学科32期生  
(平成23年 3月卒業)  
松井 基浩

## 小児がんに対するより良い医療を目指して



皆様、こんにちは。私は2011年3月に浜松医科大学を卒業し、聖隷三方原病院で初期研修、国立国際医療研究センター小児科で後期研修を修了し、現在、東京都立小児総合医療センターの血液・腫瘍科で小児がんを診る医師として働いています。

小児がんを診る医師となることを目指したのは、高校1年生の時でした。今まで病気などしたこともなく、健康に過ごしていたある日、突然「がん」と告知されました。高校生ながら、「がん」＝「死」という連想が頭に浮かび、絶望、恐怖、拒絶など色々な感情に振り回されました。診断はT細胞性急性リンパ芽球性リンパ腫でした。高校生としての日常生活を奪われ、代わりに抗がん剤治療という試練を受け渡されました。「何故自分だけがこんなことにならなければならないのか」と塞ぎ込まずにはいられませんでした。そんな自分を立ち直らせたのが、同じく小児がんを闘う子どもたちでした。当時小学生くらいの子もたちは自分の病気、治療のことを理解して受け止め、その中でとにかく明るく、前を向いて病院で過ごしていました。「自分だけ・・・」と思っていた自分が恥ずかしかったです。彼らの姿が自分に前を向く力をくれました。その時、自分に力くれた、小児がんの子どもたちの力になれる仕事をしようと、小児がんを診る医師を目指しました。

医師を目指すこととともに、もう一つ目指すことがありました。それが「若い(AYA世代\*)の)がん患者さんの闘病環境をより良いものにする」ということでした。自分が闘病した際は、同じ年代のがん患者さんと共に闘い、闘病の知恵や病気と向き合い前を向く力を共に与え合った中で闘病でした。そんなこともあり、私の記憶の中の闘病期間は楽しい思い出も多かったです。しかし、多くのがん患者さんと知り合い、全国各地には孤独に苦しみながら闘病している人たちが多数いることを知り、そこで、がんを経験したからできることとして、若年性のがん患者の会「STAND UP !!」を立ち上げ、全国各地で闘病する患者さんを一つの輪で繋ぐことを考えました。現在、500人以上の若年

性がん患者さんが所属し、若年性がん患者さんの輪が広がってきています。これからも、一人でも孤独にがんを闘病することのない社会を目指して、STAND UP!!の輪を広げていきたいと思ひ代表として活動しています。

自らの闘病から早14年、ようやく今年小児科専門医を取得し、小児血液・腫瘍科という目指したスタートラインに立てました。医師として、小児がん患者さんの力になれるよう、小児血液・がん領域で活躍できるよう、日々研鑽しています。また、小児がん経験者として、闘病環境をより良いものにすべく、これからは患者会含め活動していきたいと思ひます。

\*AYA世代:  
Adolescent and Young Adult (思春期と若年成人)



▲全国から若年性がん患者100人程度集まる「STAND UP!!」イベントの写真です。



# 浜松医科大学基金へご協力いただき、心よりお礼申し上げます。

ご寄附いただきました方々へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公表不可の方及び本学職員につきましては掲載しておりません。万が一お名前がもれている等の不備がございましたら、誠に恐縮ではございますが、基金事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。また、高額のご寄附をくださった方のお名前を「浜松医科大学基金寄附者銘板」に記し末永く顕彰させていただきます。

2016年9月～2017年1月ご寄附分を掲載

■ 寄附実績

35,173,000円 / 135件

## 個人寄附者ご芳名(五十音順)62名

うち掲載を希望されない方 14名

天方 啓二 様  
市山 新 様  
宇賀田 裕介 様  
鶴沼 肇 様  
江田 晴夫 様  
大木 俊夫 様  
太田 誠志 様  
太田原 武 様  
大橋 幸由 様  
金丸 光隆 様  
金子 榮藏 様  
金子 寛 様  
河合 俊 様  
河崎 孝弘 様  
河田 光弘 様  
川村 欣也 様  
川村 素子 様  
小出 幸夫 様  
小島 聰 様  
小林 隆夫 様  
坂本 泰子 様  
佐藤 清昭 様  
清野 俊哉 様  
高橋 清夫 様

滝浪 實 様  
田中 良明 様  
筒井 祥博 様  
寺田 護 様  
鳥山 裕史 様  
永島 泰 様  
中村 幸男 様  
中村 将登 様  
中山 善之 様  
根木 忠広 様  
袴田 睦 様  
花村 好正 様  
原田 幸雄 様  
藤井 明 様  
前川 博 様  
間賀 俊朗 様  
松島 肇 様  
松本 かおり 様  
村上 優子 様  
山下 富雄 様  
山田 久仁夫 様  
吉野 秀夫 様  
渡辺 省吾 様  
渡辺 正雄 様

## 法人等寄附ご芳名(五十音順)47団体

うち掲載を希望されない団体 2団体

有澤産婦人科医院 様  
石井第一産科婦人科クリニック 様  
井田内科呼吸器内科 様  
一般社団法人 引佐郡医師会 様  
医療法人弘遠会 様  
医療法人社団 三宝会 様  
医療法人社団 愛光会 小出胃腸科内科医院 様  
医療法人社団 青島眼科 様  
医療法人社団 あずま会 様  
医療法人社団 あゆみ会 まさふみクリニック 様  
医療法人社団 匠心会 せのお内科・消化器科 様  
医療法人社団 一穂会 西山病院 様  
医療法人社団 岡崎会 様  
医療法人社団 公章会 五十嵐クリニック 様  
医療法人社団 三誠会 北斗わかば病院 様  
医療法人社団 三陽会 様  
医療法人社団 穰クリニック 様  
医療法人社団 新風会 丸山病院 様  
医療法人社団 瑞悠会 様  
医療法人社団 泰誠会 大脇産婦人科医院 様  
医療法人社団 泰成会 森耳鼻咽喉科 様  
医療法人社団 ティ・エス・ティ会 様  
医療法人社団 永田眼科 様

医療法人社団 はやせ会 様  
医療法人社団 朋久会 和田医院 様  
医療法人社団 山本子どもクリニック 様  
医療法人社団 和晃会 佐野内科クリニック 様  
遠州信用金庫 様  
加藤産科婦人科医院 様  
兼子眼科 様  
株式会社 静岡銀行 様  
岸本内科クリニック院 様  
くまがいクリニック 様  
幸田子供クリニック 様  
JA 静岡厚生連 遠州病院 様  
JA 静岡厚生連 静岡厚生病院 様  
セキスイハイム東海株式会社 様  
中岡クリニック 様  
なかむらクリニック 様  
西脇医院 様  
服部医院 様  
浜松医科大学看護学科同窓会 様  
浜松医科大学精神医学講座 様  
浜松医科大学同窓会松門会 様  
安田クリニック 様

本学教職員寄附者 26名

### ご寄附のお申し込みについて

電話、FAX、またはメール等でお名前とご住所をお知らせください。ご寄附に必要な書類をお送りいたします。浜松医科大学基金ホームページより、クレジットカードでのご寄附も受け付けております。

浜松医科大学基金ホームページ  
<http://www.hama-med.ac.jp/kikin/>

### お問い合わせ先

浜松医科大学基金事務局 総務課広報室広報・基金係  
〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1  
E-mail [kikin@hama-med.ac.jp](mailto:kikin@hama-med.ac.jp)

TEL 053-435-2107 FAX 053-435-2112

## 浜松医科大学建学の理念

第1に優れた臨床医と独創力に富む研究者を養成し、第2に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、第3に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康と福祉に貢献する。

## 浜松医科大学の目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。

原稿募集

小誌をご覧になられた感想はいかがでしたでしょうか。誌後のご感想やご意見をお寄せください。また、各欄(「研究最前線」「海の向こうで」「大学ニュース」「寄稿」「卒業生は今」など)への投稿や本学に関連する写真を、随時、募集しています。職員や学生だけでなく、広く関係者の方々からのご提案をお待ちしております。誌面づくりに、ぜひご参加ください。

広報室 [koho@hama-med.ac.jp](mailto:koho@hama-med.ac.jp)

編集後記

この編集後記をご覧になられた方であればお気づきと思いますが、浜松医科大学では基金を創設し寄附の募集を開始しました。2016年9月から2017年2月までになんと3500万円もの寄附をしていただきました。一部の自治体のみならず、これだけ短期間で多額の寄附を頂けるのは、まさに本学が地域に根差した医療を継続して、地域社会から愛されているからに他ならないためと思っております。今回の紙面内でも多方面で活躍される方々の記事が綺羅星のようにちりばめられております。寄付金と合わせて本学の未来の明るさを示すものだと思います。

ニュースレター編集委員 T.I.

ニュースレターはホームページからもご覧いただけます。

<https://www.hama-med.ac.jp/>



編集・発行 浜松医科大学ニュースレター編集委員会

発行日 平成29年3月1日

お問い合わせ 国立大学法人浜松医科大学 総務課 広報室  
〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山一丁目20番1号  
TEL.053-435-2111(代表)